

『山びとの記 木の国 果無山脈』(宇江敏勝著)

紺碧の黒潮が押し寄せる紀州の山地は、荒々しい太平洋岸の荒波と海洋性の温暖な気候・植生が造り出した深山幽谷が織りなす特異な景観を持っている。海岸に屹り立つ多くの奇岩・巨岩、温暖多湿な気候に育まれた深い森林等々の豊かな自然景観である。

南紀熊野は海洋性の照葉樹林が茂り如何にも南国沿岸の山々を感じさせるが、その特異な景観は神秘的な宗教観を産んで大昔から修験道や補陀洛渡海などの信仰を発達させた聖地でもあった。

平安時代の皇族・貴族等もこの聖地の御利益に与ろうと遥々京の都から熊野三社（本宮、新宮、那智の三熊野大社）に詣でた。いわゆる「熊野詣」である。やがて時代が下るとこの熊野詣は武士や庶民層にも流行し「蟻の熊野詣」と呼ばれるほどの盛況を呈した。

「熊野」や「紀ノ国」という言葉を聞けば、紀伊半島や近畿地方に直接の縁がない我々でも心の隅に何か郷愁を覚えるのはこのような太古からの歴史の積み重ねが知らず知らずの内に我々の心の中にもインプリントされているからではなかろうか。また、近年「熊野古道」が脚光を浴びて登山の世界でも「大峰奥駈け」などの旧修験道のトレースを辿る人も増えているので、熊野の山々を歩かれた方々も多いことと思う。

さて、道草が過ぎた。

本書は、生れた時から親の生業^{なりわい}に従って紀州の山奥での炭焼きから始めて、植林、伐採、山林造成などの専ら山奥での林業に従事しながら、その一方で山中での暮らし、山仕事の様子、山の四季、山の民俗、山中の伝承や奇談・怪談などをエッセイや小説に仕立てて多くの著作をものされた一林業労働者が綴った山暮らしの記録である。副題に「木の国 果無山脈」と題されているのも何やら深山幽谷の辺境を思わせるようで興味をそそられる。この本の舞台も主にこの果無山脈^{はてなし}である。

果無山脈というのは、奈良県と和歌山県を隔てる県境の山脈で、山奥の大変な僻地であり、熊野詣の最も困難なルートである「小辺路」ルートや、吉野山地からの「大峰奥駈け」ルートもこの山脈を越えて通っている。私も西国観音巡礼の時に通ったことがあるが、見渡す限りの山の中であった。

さて、この本で紹介されている山暮らしの様子は既に半世紀も前のことなので、今では過ぎ去った遠い昔のことになるが、田舎の山村で育ったご年配の方々には何某かの感慨があるのではなかろうか。また、林業を取り巻く環境は大きく変化しているし、今では生業として成り立たなくなるほど衰退しているらしいが、この本に書かれている内容はつい昨日のことのよう新鮮に感じられるのは、著者の筆の力だけでなく、山の自然への共感や林業、山仕事への篤い情熱によるものであろう。

著者は既に数十冊の著書を世に出されているが、この本はそれらの多くの著書の出発点ともなったデビュー作であり、初版は半世紀も前に出版された本であるから長い間品切れとなっていて入手しにくかったが、この度ヤマケイ文庫として再出版されたので求め易くなった。

我々が山を歩く時には、よく手入れされた樹林帯では楽しく歩けるし、逆に放置されて荒れた植林地帯では暗い感じがすることは皆さん日頃から経験されているとうりである。この本は登山自体の本ではないが、山仕事を通しての“山”全体への共感と思いに満ち満ちているので、林業の門外漢である我々にも納得させられる点が多い。著者による熊野古道や奥駈道のガイドブックも別途出版されている。

ヤマケイ文庫 2021年9月刊 1,100円（税共）

